

## 夜支布山口神社 (やぎゅうやまぐちじんじや)

大柳生の氏神で、祭神はスサノオノミコト。「三代実録」に貞観元年(859)に止雨を祈った社として記されており、水の神、祈雨の神として信仰されてきたことが窺える。当社には、一年交代で集落の長老の家に神様の分霊を迎える「廻り明神」という珍しい行事が伝えられており、また毎年8月17日に氏子の青年達によって奉納される「太鼓踊り」は、七百年の伝統をもつ貴重なもので、県の無形民族文化財に指定されている。摂社の立磐神社は巨大な陽石を神体とし、柳生町の天乃石立神社とともに古代の巨石を物語るもの。本殿は、春日大社の第四殿を移したもので、重要文化財。

### 廻り明神と太鼓踊り

大柳生町の上出、塔坂、西の三つの地区では、在地の家で祭儀を執り行なう風習があります。それが「当屋(とうや)」です。当屋になった家では自宅の天井に青竹の屋形を組み、神の分霊の「廻り明神」を祀り、当屋の主人はこの間、穢れの場所に入りしないようにして、廻り明神を祀った部屋でひたすら禁欲生活に勤めなければなりません。また毎月1日、11日、21日には山口神社に参拝して、その時は神の葉を口に啜え、途中誰の問いかけにも、答えてはならないといわれています。

太鼓踊りは、その廻り明神に対して奉納されるもので、当屋の庭先で村の若者たちによって繰り広げられる勇壮な踊りは、戦勝祈願の踊りとも伝えられます。

踊り手は8人、大太鼓打ち4人、歌い手(歌アゲ)3人、笛2人、鉦(かね)1人からなる構成で、見ものはもちろん踊り手の舞い。白鉢巻に紺の上着、胸から背にかけて十文字にたすきをかけ、背にシナイと呼ばれる旗差し物を背負って、胸に付けた鞆鼓(かっこ・小太鼓)を打ちながら左右に行きかわし、足を踏み鳴らし、飛び上がり、二列になり、一列になり、真夏の夜に乱舞するのです。

一方、歌い手の歌詞は素朴で、例えば次のような歌が踊りに合わせ歌われます。

俺が弟の若松は	まだ十五にもならぬのに
文字の一字もたしなむ	サア おたしなむ
刀は何と好まれた	二尺七寸の並のひら
若松様に差された	サア お差された



#### 山口神社

11月の下見の時の写真です。「昼なお暗い境内に居並ぶ社殿はいずれも鮮やかな朱色に彩られ、森も緑に映えている」という作家の邦光氏の文章そのままの光景が、そこにありました。

この歌詞は、奈良市の教育委員会で作成された「奈良の伝統芸能 大柳生の太鼓踊り」というDVDで見たもので、「若武者踊り」という曲ですが、DVDには、このほかに、「屋敷踊り」「山伏踊り」という曲が入っていました。

ところが最近はどうも様子が違って、太鼓踊りは当屋の庭先ではやらないらしい。で、県立奈良民族博物館（これは大和郡山市にあって池田さんの家の近くです）で聞いてみると、三年ほど前から山口神社の近くの広場で、三地区合同の青年団がやっているとのことでした。たぶん当屋の負担が大きすぎたり、一地区だけの青年団では太鼓踊りの構成が出来ないというような事情があるのでしょうか。

太鼓踊りは文字通り太鼓を叩きながら踊るものですが、いろいろな形で全国各地に伝わっています。もちろん奈良にもあります。さらに調べてみました。

### 太鼓踊り、なむで踊り、そして風流念仏踊り

太鼓踊りは、芸能史で「風流」(華麗な扮装で、囃子ものを伴っての群舞)と呼ばれ、その起源は雨乞い神事にあると云われています。

奈良県には各地に太鼓踊りが残っており、都祁村の吐山地区の下部(おりべ)神社、吉野下市の丹生川上神社、及び大柳生の太鼓踊りは、ともに県の無形文化財に指定(1985年)されている貴重なもので、都祁村の太鼓踊りが、素朴な庶民の雨乞い神事を色濃く残しているのに対して、大柳生の太鼓踊りの勇壮な舞は、雨乞い神事から民族芸能に発展したものだと言われています。

太鼓踊りは別名、「なもで踊り」ともいわれますが、これは「南無阿弥陀仏踊り」、すなわち「念仏踊り」からきた名称で、戦国時代から江戸時代にかけて、各地で盛んに踊られた「風流念仏踊り」の系統を引き次ぐものようです。

念仏踊りは、室町末期の応仁の乱以降、全国各地を遊行した聖たちによって広められていったもので、彼らは詠唱念仏に合わせた踊りが、あらゆる災害の根源になる御霊(荒魂)を鎮めると説き、念仏に合わせた踊りを勧進の手段として、村々で「大念仏」を催したのです。やがて、この念仏踊りは、衣装や負い物、花笠、動作、囃子、踊り歌などで風流化が進み、今日各地に残る太鼓踊りや花笠踊り、願人踊り、綾踊りを生んだのでしょう。今日の我々に馴染みが深い「盆踊り」も、この風流念仏踊りの名残りかもしれないと思うのですが、どうでしょう。



左 大柳生の太鼓踊り  
右 都祁村の太鼓踊り

絵馬だけに伝わっている太鼓踊りもあります。結崎の糸井神社、安堵の飽波神社、高取町の小島神社などに伝わる、「なもで踊りの絵馬」がそれで、そのうち飽波神社の「なもで踊り」は、神社に伝わる衣装や太鼓などの道具、さらには歌詞本などを参照して、平成7年に保存会の手で百年ぶりに復元されました。

「 ありがたや 安堵の明神 ありがたや 雨は降らしやる 雨は降らしやる  
立願の踊りは ひと踊り テンツクツ テンツクツ...」

百年ぶりに蘇った歌詞には、百年前の庶民の素朴な願いが籠められているようです。

## 再び大柳生へ（カラーブックス「柳生の里」の邦光史郎氏の文から）

『奈良から歩けば果てしなく山を越えてきたという感じがする。円成寺からさらに一度山を越えたところに、大柳生の集落は横たわっている。四囲を低い山々に囲まれ、水田が帯のように続く、のどかな田園風景である。』

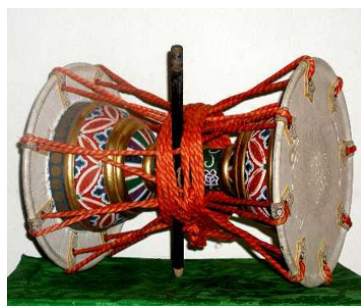
山路を大柳生の部落に入りかけると、右手に黒々と茂った森がどうしても目に飛び込んでくる。森というよりは樹木に覆われた丘といった方がよかろう。土地の人はこれを「古墳の森」と呼んでいる。往時、柳生に旅する人々の、恰好の目印であったに違いない。その一角に鎮まる山口神社は、延喜式にも名がみえる古社。最近修復されたとかで、昼なお暗い境内に居並ぶ社殿はいずれも鮮やかな朱色に彩られ、森の緑に映えている』

これは、柳生街道の古いガイドブック、カラーブックス「柳生の里」(保育社)の文で、書かれたのは作家の邦光史郎氏。1971年の初版ですから、その少し前に書かれたのでしょう。1971年といえば万博の次の年、それから、日本も大阪も奈良も飛鳥も大きく変わったのですが、どうですか、この文章の山口神社付近の光景は、僕たちが今見ている景色とほとんど変わらない。それがたぶん、この大柳生町に太鼓踊りが伝えられてきた秘密のような気がするのですが、どうでしょう。

資料は本文に掲載のもの他に「大和の祭り(高田健一郎著)向陽書房」、「仏教芸能と美術(名著出版)」、それから「平安妖異伝(平岩弓枝著)」等を参照しました。

最後の「平安妖異伝」ですが、もちろん小説です。それも妖異伝ですから物の怪とか妖怪が出てくる平安朝を舞台にした大衆小説で、物の怪は実は、雅楽の管弦で使用される楽器なんです。遣唐使や遣隋使の手によって数奇の運命で大陸から運ばれた彼

らは魂を持っている。小説ではその頃は演奏されることも無くなって人々から忘れ去られた珍しい西域や印度の楽器が、妖怪になって出てくる。



で、「太鼓踊り」で出てきた「鞆鼓(かっこ)」が「狛磨の鼓」という章で出てきます。「鞆鼓」は「鞆鞆(まっかつ)」という国から伝えられたということを、この小説で知りました。ほかにも様々な楽器が登場します。面白いです。読んでみて下さい。ちなみにBOOK-OFFで105円で買いました。